

<b>Title</b>	カッシーラーにおける心身論とシンボル機能：『〈精神〉と〈生命〉』と題する二論文の研究
<b>Author(s)</b>	齋藤，伸
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要，No. 48：355-376
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2262">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=2262</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# カッシーラーにおける心身論とシンボル機能

——『精神』と『生命』と題する二論文の研究——

齊 藤 伸

## I. 序論Ⅱ二つの『精神』と『生命』

数あるカッシーラーの著作の中で、『精神』と『生命』と題され、彼の哲学を現代の哲学的人間学との関連において考察する上で重要だと思われるものが二つ存在する。一方は、彼が『シンボル形式の哲学』第三卷「認識の現象学」のはしがきで述べているように、当初の計画ではその結論部分として用意された。<sup>(1)</sup>そこにおいて彼は、現代哲学、とりわけ「生の哲学」に対する「シンボル形式の哲学」の立脚点の表明と、現代の哲学における根本問題としての心身の問題から、彼のシンボル哲学そのものの基礎づけを行う予定であった。しかし彼は、二つの理由によつて、それを断念せざるをえなかった。

第一の理由は第三卷の著述が膨大になり過ぎたことである。彼が述べているように、第三卷で書かれた頁数は、第一卷及び第二卷と比べても二倍にも達し、結論部分として用意された百頁を超える原稿を加えることは困難であると判断された。<sup>(2)</sup>そして第二の理由は、第三卷の本論において、中心的な問題として扱われた認識論とは異なつた道筋を辿る議

論を加えることは、第三卷の構成として有益ではないと思われたことである。<sup>(3)</sup>しかしカッシーラー自身は、「シンボル形式の哲学」の体系にとつて、人間の「精神」と「生命」の問題が必要不可欠なものであると主張する。そこで彼は結論部分で扱われるはずであつた心身問題について、次のように述べている。

私はこうした議論そのものを放棄するつもりはない。というのも、私には自身の思想をいわば真空のうちに置き、それと学的哲学の営為全体との関係や結びつきを問おうとしないような、今日またもやしきりに愛好されている慣わしは、決して有益だとも生産的だとも思われなからである。こうして、当初本巻を締めくくるはずであつた批判的な最終章は、将来別に出版するために留めおかれた。まもなくこれを『精神』と『生命』——現代哲学批判』という表題のもとに発表したいと思つてゐる。<sup>(4)</sup>

しかしながらこの原稿は、彼が生きてゐる間に出版されることはなく、遺稿として『シンボル形式の哲学』第四卷の計画のうちに発見された。<sup>(5)</sup>この遺稿は『精神』と『生命』と題されており、冒頭部には、本来は第三卷の結論として書かれたことを窺わせる文章が残されている。<sup>(6)</sup>そこではジンメルジンメルの議論を中心に、現代の「生の哲学」を批判的に検討することによつて、彼自身の立場が述べられた。

カッシーラーによるもう一方の心身論は、『現代哲学における〈精神〉と〈生命〉』と題されている。この論文は有名な一九二九年にスイスで行われたゼミナールにおけるハイデガーとの討論、所謂「ダヴォス討論」でのカッシーラーの講演録である。それは初めに『シェーラーの哲学における精神と生命』という題で、小さな新聞にその要旨が掲載され、翌年の一九三〇年に『現代哲学における〈精神〉と〈生命〉』として発表された。

当時のドイツでは、一九二八年に出版されたシェーラーの『宇宙における人間の地位』によつて提起された問題に

よって、人間学が哲学の中で中心的な問題の一つとなっていた。そこでカッシーラーはこの論文において、シェーラーが意図するところのものを十分に尊重しつつ、それが含んでいる不完全さを補うことによって、新たに彼自身の哲学的人間学の立場を示した。それゆえに一九二八年に用意された第三巻の結論部分よりも、この論文ではシェーラーの問題提起を受けて、いつそう深化された実り多い議論がなされた。こうした意味においても、この論文がカッシーラーの心身論を理解する上では、極めて重要な資料となると思われる。

本稿では便宜上それぞれの論文の混同を避けるために、以下一九二八年に書かれた『シンボル形式の哲学』第三巻の結論部分、『精神』と〈生命〉を「第一論文」と、そして一九三〇年に発表された『現代哲学における〈精神〉と〈生命〉』を第二論文と呼ぶこととしたい。両論文におけるカッシーラーの「精神」と「生命」に関する主張は一貫してはいるものの、そこでは異なった道筋を辿る議論がなされている。さらには第一論文が書かれた後にシェーラーの『宇宙における人間の地位』が発表され、先に引用したカッシーラー自身が第三巻の冒頭で述べた心身論の構想の中に、シェーラーの人間学は含まれてはいなかった。その後シェーラーの著作からカッシーラーが何らかの影響を受け、自身の人間学をいつそう発展させたであろうことは明らかである。しかし、第一論文において展開された優れた議論が、全てそのままの形で第二論文へと受け継がれているわけではない。そのため本稿では、両論文で主張されている思想を順に検討することによってカッシーラーが真に意図したと思われる心身論の解明を試みる。

## II. 第一論文における「精神」と「生命」

### (一) ジンメル の「生の哲学」とカッシーラーの立脚点

現代の形而上学において「精神」と「生命」の問題はその中心問題の一つであった。この問題はあまりに決定的な影響力をもっていたために、従来の形而上学的な対立問題、たとえば「存在」と「生成」、「単」と「複」、「質量」と「形式」、「魂」と「身体」などをすべて取り入れた上で、一つの統一的な主題へと収斂させるように導かれた。ところでこうした事態に際し、「精神」と「生命」の関係を鮮明化し、単に意識の問題であったものを思想の問題へと発展させたのはジンメルであった。ジンメルは『生命の超越的特質』（一九一八）において、人間の精神が生命から生じたことを主張した。彼によると精神自体とその機能である思考「形式」は、生命が自身の目的のために生じさせたものであり、その後生命はその目的を達成するために精神または形式に対して服従するようになる。彼はこうした精神と生命の律動的な展開を「観念への転換」(Wendung zur Idee)と呼んだ。ここでは生命が軸となり、観念を異なつた方向へと設定する機能がそこに見出される。このような観念の方向転換が生じた後になつてのみ、初めのうちは生命に対しては受動的であるように思われた精神的形式が、能動的な力をはじめる。こうして初めてそれらは純粹に生命的な本能または衝動に従うだけの存在であることをやめ、むしろそれらを支配する力となつて作用しはじめる。

しかしながらカッシーラーは第一論文において、ジンメルが採用したような、生命と精神とを実体的に対立するものとして捉え、一方から他方へと超越することによつて、新たな次元へ至るといった考えを否定する。カッシーラーに

よると、ジンメル主張は生命が觀念または精神へと達する際には、生命自身に与えられている現実を超えていかなければならない。しかし、ジンメルによるこうした新たな洞察においてでさえ、超越論的な問題の中へ「空間的な」推論が混入されている。たとえば「此方にあるもの」(Diesseits)と「彼方にあるもの」(Jenseits)、および「それ自身に留まるもの」(In-Sich-Bleiben)と、「それ自身を超えていくもの」(Über-Sich-Hinausgehen)、さらに生命の「内在的」様相と「外在化」など、これらの対立は全て相反するものによつて再び確かなものとされるにもかかわらず、単独でもその文字通りの意味において理解され得る。それと同じように「生命」と「形式」とは、現実の人間における二つの異なつた領域であり、一方でこれらは全く調和することなく対立している両極であるにもかかわらず、他方では両者間の溝は、全く隙間なく閉じられている。ジンメルはこうした事物の見方から生じる絶対的な矛盾を、「觀念の無力さ」によるものと断じた。そのためジンメルにとつて「精神」または「形式」とは、それは一つの抽象概念であり、確定した生命過程への対立者として理解された。こうした点においては、純粹に超越論的な対立であつたはずのものが、空間的な対立であるかのように記述されたのである。

そのためカッシーラーはこのようなジンメル主張が、特定の思考様式、または特定の空間的思考においてのみ妥当するのではなからうかと疑念をいだく。<sup>(7)</sup>そこで彼は、「シンボル形式の哲学」の体系において「精神」と「生命」との対立を、両者によつて形成される機能的連関という新たな観点から明らかにする。この点について彼は次のように主張する。

我々は単に生命の「直接性」(unmittelbarkeit)と、確定された対立極としての思考および知的意識の「間接性」(mittelbarkeit)一般とを対比させるのではない。むしろ我々は、両者における媒介過程が、言語、神話、認識において生じるものとしてのみ評価し得るのである。<sup>(8)</sup>

精神と生命は、それぞれが自身の内に初めから対立しながらも合致するという矛盾の要素を含んでおり、どれほど深くそれら自体を分析しようとも、二元論的にそれぞれ完全に独立した二つの主体または実体を捉えることはできない。というのもカッシーラーによれば、完全に生命のない形式は存在しないし、また、完全に形式のない生命も存在しないから。それゆえ彼の心身論においては、精神と生命との対立は、生命や精神それ自体を対象として、それぞれを独立した「實在」として把握されるのではなく、それらが働く機能的な作用から考察されたのである。

## (二) 協働する「形式」と「生命」

カッシーラーの心身論では、「精神」と「生命」の対立は、さらに包括的に「形式」と「生命」の対立として立てられ、文化を生み出す人間の根源的な創造性との関わりから、それら相互間における「相関」(Korrelation)と「協働」(Ko-Operation)の機能から本質が明らかにされる。<sup>(9)</sup> 上述のようにカッシーラーは、精神と生命とを二つの完全に独立しながら対立しあうものとしてではなく、それを「人間が生成の過程において規定する二つの側面 (zwei Accente)」<sup>(10)</sup>であると主張する。

このような事態が最も明瞭に現れているものは言語である。一見すると言語形式は、生命としての発話衝動を抑制し、束縛する対立者であるかのように思われる。しかしこうした外的な二元性も、カッシーラーによるとフンボルトが言ったように、言語をエルゴン(所産)としてではなくエネルギーア(能産)として捉えるならば解消される。フンボルトは言語とは、その行使の外に存在するものではなく、絶えず繰り返される形成作用であると主張した。カッシーラーはフンボルトの定義に従って、言語の行使すなわち発話行為について次のように主張する。

発話行為とは決して単なる取得行為 (Aneignung) ではなく、むしろ小規模でありながらも、それはある創造的行為 (schöpferischer Akt)、すなわち刻印 (Prägung) と再刻印 (Umprägung) の行為なのである。

——形式は明らかにそのような足かせ (Hemmschuh) ではない。むしろそれは、常に用意されている器官 (Organ) なのである。<sup>(11)</sup>

このようにカッシーラーは形式と生命との対立が、存在の問題として扱われるならば、決して架橋することができない深淵のように思われるが、一度それを純粹に機能的な対立として捉えられるならば、この深淵は橋渡しされると主張した。たしかに生命としての発話衝動は、それ自体では単に空气中へと吐き出される吐息のように瞬間的であつて、一切の恒常性を備えてはいない。しかしこうした衝動が、形式と出会うことによって初めて持続性と恒常性を備えた「言語」として機能するようになる。しかしこのような生命と形式との出会いは、生命が形式の中へと埋没することを意味しているのではない。カッシーラーによると、そうした生命の個別性が強くなるのに応じて、形式に対する志向性・方向性・力動性・そして律動性として言語自体に影響しはじめるのである。そのため言語をフンボルトが主張したように、所産としてではなく、能産として、すなわち創造的な主観性としての「形式」を捉えることができる。したがってカッシーラーの心身論においては、「精神」と「生命」または「形式」と「生命」とは、異なつた機能を備えたものであつても、完全に対立しあうのではなく、そこには「相関」(Korrelation) と「協働」(Ko-Operation) の作用が見出されると説かれた。<sup>(12)</sup>



### (二) 能産的形式と所産的形式

こうして「生命」に対する不可分の協働者として捉えられた「形式」は、さらにカッシーラーの第一論文において、極めて重要な区分が立てられる。これはスピノザがその形而上学において使用したことから周知のものとされるものであつて、スコラ主義形而上学の「所産的自然」(*natura naturata*)と「能産的自然」(*natura naturans*)との区別と同様に、シンボル形式の哲学は「能産的形式」(*forma formans*)と「所産的形式」(*forma formata*)とを区別しなければならないと主張する。ここで彼は、ジンメルが主張したように、精神または形式を生命とは隔絶した領域に属するものとして理解するのではなく、精神や文化の発達過程に着目する。上述の発話と言語形式の例からも明らかのように、生命はそれ自身の固有な力だけによつて自己を維持することはできない。そのため生命は能産的形式として、そこから所産的形式へと昇華されなければならない。しかしこの場合、それは再び能産的形式として現れるために、その本来的な生命を保持し続ける。こうした能産的形式から所産的形式へという運動こそが、精神の発達過程であるとカッシーラーは主張する。ここでもまた、「形式」と「生命」とは此方から彼方へ、そして再び此方へと相互に行き来し、生成する形式によつてこそ本質が現れてくる。ジンメルが生命の「観念への転換」と呼んだものとは異なり、カッシーラーの心身論においては、生命が観念へと転換するだけではなく、観念は再び生命へと立ち戻ると主張される。この点については次のように述べている。

「観念への転換」を、生命が何か異質で、かけ離れたものへと歩み入るために、自身に別れを告げさせるものとして記述することはできない。むしろ生命とはシンボル形式の媒体によつて、自身への帰還として、つ

まり「それ自身に至る」(zu sich selbst kommt) ものとして理解されなければならない。<sup>(13)</sup>

このようにしてカッシーラーは、能産的形式は所産的形式へと至り、さらには再び自身へと帰還するものとして理解する。こうした二つの異なった形式間における移動、すなわち前述のカッシーラーの表現では「相関」と「協働」の作用を、最も強く意識したのは言語の詩的創造力の精神であった。全ての偉大なる創作者や詩人たちは、誰もがここで言われている所産的形式による限界と束縛とを痛感していた。しかし、有限な所産的形式の内には無限な能産的形式としての言語の形相力が含まれており、言語表現の豊かさと創造性の力は生命のない作品として埋没することなく、絶えずその内で息づいている。

### Ⅲ. 第二論文における「精神」と「生命」

#### (一) シェーラーの『宇宙における人間の地位』の考察

ルートヴィヒ・クラークゲスの著作において人間の精神は、神と生命に対する敵対者、または生命を破壊するものとして叙述された。さらにそこでは、精神は知性や判断力と同等のものとして理解され、生命に対する根源的な闘争状態が主張された。精神をこうした地位から解放したのがマックス・シェーラーの『宇宙における人間の地位』であった。<sup>(14)</sup>それは精神と生命との関係を、新たに人間学的な構図の下に捉えなおすという、古典的な形而上学からの画期的な展開であった。上述のようにカッシーラーは、シェーラーの問題提起を受けて、第二論文において『宇宙における人間の地

位』で述べられた議論を批判的に検討し、独自の人間学的立場を表明した。

カッシーラーによれば、そこでのシェーラーの主張は、依然として冒険的な企てであつて、個々の短いスケッチが示されただけであつた。しかしながらそこには、伝統的な形而上学が根本思想として用いた一元論的な「同一哲学」を断固として拒否し、人間における根源的な二元性を主張したという点において傾聴に値する。そのため必然的にシェーラーの心身論において精神は、生命から進化したものとしては理解されない。むしろ人間の精神は生命の機能や行為から生じたものではなく、始原よりそれだけが異なつた領域に属していると彼は主張する。さらに彼にとって精神は、人間を有機的な生命から開放するものであると主張される。シェーラーによると人間とは、生命的な衝動や、それに伴う活動を否定することができる者、すなわち現実存在するものに対して、常に「はい」としか言うことができない動物と比べて、人間は「否と言いうる者」(Neinsagenköhner) または「生命に対する禁欲者」(Asket des Lebens) である。まさにこうした「否」と言いうる精神によつて、人間を全ての生命的な衝動や本能によつて支配された領域から脱却させ、彼を人間独自の地位へと高められる。この点について彼は次のように説く。

そのような〈精神的な〉存在は、もはや衝動や周囲世界に拘束されていないで、それから自由であり、我々が好んで名づけているように、世界開放的 (weltoffen) である。そのような存在は「世界」を所有する。それは根源的には彼に与えられた周囲世界に対する抵抗や反応の中心を「対象」にまで高めることができる。<sup>(15)</sup>

こうしてシェーラーにとつて人間は、自身を取り巻く周囲世界、すなわち現実束縛されることなく、現実的なもののみならず、「可能的」なものを自由に捉えることができる存在として理解された。しかし一方で、ここで人間の特殊地位を確保する精神は、自身の内から生じた活力をもつて生命に敵対するのではない。彼によると人間の精神とは根源

的に無力なものであつて、精神は自身の理念構造と意味構造にしたがつて、単に生命の諸力に特定の目標を与えるだけに過ぎない。そのため精神は生命的な衝動の力に対して、ただ理念を差し出すだけであり、シェーラーにとっての精神と生命との関係は、当初より精神的理念と価値の全てに対して盲目的な衝動との相互浸透として理解される。

## (二) シェーラーの心身論における二つの問題点

こうしてシェーラーによつて提起された人間学的な心身二元論は、一方ではそれまでの形而上学や「生の哲学」を推し進め、新たな人間像を構築したが、他方ではカッシーラーによると二つの問題点を孕んでいる。

(一) 第一の問題点 上述のようにシェーラーは、古典的な形而上学が主張したような「同一哲学」を拒否したために、その結果として精神と生命とを全く異なつた領域に属するものとして二元論的に理解した。この点にカッシーラーは第一の問題点を見出し次のように問う。

もし生命と精神が完全に異質な世界に所属するなら、その本性においても、その起源においても相互にまったく見知らぬものであるなら、それにもかかわらず、それらが協力して特殊な――人間的な世界を、つまり、「意味」(Sinn)の世界を構成しながら相互に作用しあい、浸透しあうような、完全に統一的な性能をどうして実現することができるのか。<sup>(16)</sup>

シェーラーにとって精神とは、生命的なるもの一般に対して、生命自身が単にそれらに服することに理念的な「否」

を提出する一つの原理であり、そのためそれは生命自身とは無縁な場所から生じ、決して生命と相容れることのないものとして想定されている。しかしカッシーラーは、精神と生命とが互いに現象と現象形態として分離していようと、それらを互いに無限へと向かつて延長していくならば、合致する点があるのではないかと主張する。『宇宙における人間の地位』を中心とした晩年のシェーラーが言うところの「精神」とは、明らかにアリストテレスの教説に接近しており、精神は全ての生命的な存在の上位に位置づけられている。そのためそれは、外部から生命の世界と心的な世界へと舞い降りてくることになる。しかしカッシーラーはこうしたシェーラーの主張を、第一論文において主張したように、精神と生命が完全に対立しあう概念としてではなく、相関し、協働することによつて初めて互いに機能すると理解するがゆえに、否定する。

## (2) 第二の問題点

シェーラーによれば精神は、他の全ての生命に関わるものの上位に位置し、アリストテレスが「作用する理性」と呼んだものに接近している。<sup>(17)</sup> それにもかかわらずシェーラーは精神を根源的には無力なものとして理解する。この点にカッシーラーは第二の問題点を見出し、次のように問う。「もしも精神が生まれつき完全に無力であるとしたら、この停止の働き、この独特な生命力と生命衝動を堰き止める働きが、どのようにして成功するのであるか」<sup>(18)</sup>と。

精神が完全に無力であるとするならば、生命の衝動に対して「否」と言う抑制の作用は、何らかの積極的な契機または積極的な衝動に帰せざるをえなくなる。そこでシェーラーは、生命の根源的な禁欲または道德的機能によつて、生命から力を引き出せるものと考えた。しかし彼が言うように精神とは異なつた領域である生命に対して理念を与え、方向転換を促す作用は、精神自身の内にエネルギーが含まれていなかったとしたならば不可能であるとカッシーラーは主張する。というのもカッシーラーは、第一論文で彼が述べたように、精神と生命とは互いに相関関係を構成し、協働する

ことによつて一つの全体を成していると考えるから。第一の問題点で挙げられたように、シェーラーの主張では生命とは異質な精神と、観念には盲目な生命とが前提とされているにもかかわらず、それらがいかにして互いに遭遇し、同一の目標を実現することができるのであろうかとカッシーラーは問う。

それゆえに彼は、精神と生命との間における矛盾的、または敵対的対立を否定し、精神に固有な力の存在を主張する。

### (三) 活動のエネルギーと形相を作るエネルギー

こうしてカッシーラーは第二論文において、シェーラーの思想を批判的に検討することによつて、それが含む問題点を指摘した。そこで彼は、これらの問題点を超克するために、第一に精神とは無力なものではなく、それ自身エネルギーを備えたものとして規定しなおすことから出発する。しかしその際に彼は、第一論文において二つの「形式」、すなわち所産的形式と能産的形式とを区別したのと同様に、第二論文では精神のエネルギーを二つの異なつた方向へと作用するものとして考察する。すなわちそれは「活動のエネルギー」(Energie des Wirkens)と「形相を作るエネルギー」(Energie des Bildens)である。シェーラーが精神の無力を主張した際には、彼が言うところの「力」の概念には、こうした異なつた方向へと作用するエネルギー間の区分が立てられてはいなかった。前者は人間を取り巻く環境に対して直接的に関わるのに対し、後者は精神の内において純粹に「イメージ像」(Bild)へと関わっており、常に自己充足的であり続ける<sup>(19)</sup>。これら二つの「力」の間には、単なる量的な増加や拡大ではなく、質的な相違が見出される。とはいえカッシーラーによると前者が強化されて、やがて後者へと至るといつた事態ではない。こうした内的に作用する精神の力は、人間のみに固有な力であつて、これによつて人間は他の動物とは異質な世界、つまりシンボルの世界の内に生き

ている。このような精神の働きについて彼は次のような結論に至る。

精神の世界は生命の流れがただ流れ去っていくのではなく、ある地点で引き留められるとき、つまり生命が自分自身から途切れることなく新しい生命を生み出し、そして自己自身の誕生においてそれ自身を消耗してしまう代わりに、持続する形態をひとまとめにし、これらの形を自己自身から自己の前に立てるとき、初めて成立する。したがって生命の単なる量的な増加、高まり、強化によっていつかは精神の領域に到達するのではなく、精神の領域へと入るためには必然的に方向転換と帰還、すなわち「心的な傾向」(Sim)の変化や方向性の変化がなければならない。<sup>(20)</sup>

このようにカッシーラーにとって精神は、シェーラーが主張したように無力なものとしてではなく、人間を直接的な生命の次元から彼を解放する根源的な力を備えたものとして理解される。こうした力によって人間は、物理的な現実世界から意味の世界へと、すなわちシンボルの世界に繭を作るように自身を織り込んでいく。これにより人間は、他の全ての動物が支配されている外的な刺激による「感受」と「反応」という作用と反作用の反射連鎖を喪失する。<sup>(21)</sup>このように人間は、我と世界との間に仕切りを立てることによって、直接性においてではなく、むしろ間接性において、すなわち形相力が生み出す媒介の世界の内に生きようになる。<sup>(22)</sup>

こうしてシェーラーとは異なりカッシーラーは、人間の精神に備わった力の機能を、それが作用する方向によって区別し、精神に固有な形相力の存在を主張する。まさに精神の形相を生み出す力によって、人間は他の動物とは異なり直接的な現実の世界ではなく、シンボルの意味の世界に生きており、さらにはシンボルを操る動物となることができ。シェーラーは生命とは異質な精神と、観念には盲目な生命とを想定した。しかし精神を哲学的人間学の対象として

考察するならば、我々を現実へと接近させる運動力、そして人間と世界との中間領域で作用し、我々を現実から引き離す形相力、換言すれば精神における「引力」と「斥力」とを見出すのである。

#### IV. 結論Ⅱ ロマン主義の精神と心身の対極性

これまでの考察からも明らかなように、カッシーラーは精神を自身の深みより引き出す固有な力をもって、生命に對峙する原理として理解する。そこで彼は精神と生命とは、互いに完全に異質な世界に存在するのではなく、互いに求めあい、規定しあうという對極的な構造を主張する。彼によるとこうした心身の對極性 (Polarität) には、ロマン主義の精神が浸透している。一八一〇年にベルリンの小さな夕刊に掲載されたハインリッヒ・フォン・クライストの短編『操り人形劇場』は、それが一九世紀の初頭に著されたものであるにもかかわらず、現代の哲学的人間学の根本問題を見事に解く手がかりを与えている。<sup>(23)</sup> クライストがその物語を用いて引き出した結論は、自然と意識、身についた優美さと意識的な反省とが、それぞれ全く異なった世界に属し、對極的な緊張関係を構成しているということである。そうした観点から考えてみると、現代の哲学的思考は、個性・空想・形式の自由といったロマン主義の精神に根を張っている事実が明らかであるとカッシーラーは主張する。したがって彼は「自然」と「精神」、「生命」と「知識」という對立を、ロマン主義の観点から對極的なものとして理解することができた。

第一論文において彼は、精神と生命との不可分の協働を主張したが、そこでは精神と生命との明確な位置づけがなされてはいない。そのため第二論文で彼は、シェーラーが断固として主張した「同一哲学」の排斥という手法を受容することによって、第一論文で述べたそれぞれの機能を前提としながら両者間における對極的構造を主張する。こうした点



に第一論文から第二論文への最も特徴的な発展的展開があるように思われる。

既述のようにシェーラーが言うところの精神は、それ自身は無力でありながらも生命に方向性と理念とを差し出すだけのものではあった。そのため彼の下で精神は、無力なる客観的意識を意味しており、生命が属する領域を「対象化」するだけの原理であった。しかしこの場合に精神は、自身の内側へと向かつて作用し、それ自身を対象として認識する作用が見落とされており、シェーラーの下では意識は常にその外へと向かつて作用している。それにもかかわらず彼が主張する精神は、全ての生命的なものの上に位置し、それを支配する形而上学的な実体 (Substantivum) として捉えられていた。

こうしたシェーラーの『宇宙における人間の地位』が含む問題点を超克するためにカッシーラーは、精神と生命とをそれらの純粋な機能とその働きにおいて考察した。したがって精神と生命とは、互いに異なつた領域に属するものであるというシェーラーの主張を認めつつもカッシーラーは、それぞれが全く別の目標へと向けられているのではないと言う。精神と生命は対極的な構図を形成しつつも、相関し、協働することによって初めて人間独自の領域であるシンボルの領域に到達する。実はシェーラーが「人間の特殊地位」と呼んだものへと達するためには、こうした精神と生命との相互浸透が必要とされるばかりか、むしろ不可欠なものである。そこでカッシーラーが両論文において展開した主張を踏まえ、精神と生命との関連について次のように論じる。

生命はもはやあらゆる生命に対して異質で敵対する原理として考えられる必要はなく、それは生命自身の一つの転向 (Wendung) や転換 (Umkehr) として理解されることができ。一つの転向というのは生命が自分自身のうちで経験するものであり、それは生命が単なる有機的な形成と形態の圏域から「形相」(Form) や理念的な形態化の圏域に入り込む程度に应じて経験される<sup>(24)</sup>。

さらにカッシーラーは、シェーラーが精神の客体化作用を精神自身へと向けることがなかったのとは異なり、精神をそれ自身の内において自己を否定できる原理として理解する。彼によると現代の「生の哲学」のように、精神を生命に敵対する不当な侵略者であるかのような解釈によつては、精神における客観的形態化作用の本性を明らかにすることができない。なぜなら精神を伴わない生命には言語がなく、侵略者としての精神を法廷へと召喚したとしても、そこで行われる審議も判決も、常に精神の内なる力によつてのみ行われるから。それゆえに、精神が敵対する対象は生命ではなく、実のところそれは精神自身に他ならない。カッシーラーによれば「精神が自分に対置する〈否〉において初めて、精神はその本来的な自己肯定と自己主張に向かつて突破する。精神が自分に対置する問題において初めて、精神は完全に自己自身となる」<sup>(25)</sup>のである。こうして彼は精神の告発者はその弁護人であり、さらにはその証人とならざるをえないと言う。人間のみが自己自身を対象として認識し、さらには問題として探求の目標とすることができるといふ事実からも、精神と生命の敵対的対立は解消されなければならない。カッシーラーによると精神と生命とは、絶対的に異質な領域に属するものではない。それらは対極的な関係でありながらも、互いに交流することによつて、同一の目標を達成するために協働する機能的連関によつてシンボルの世界を創りあげている。

- (1) この論文は二つの章から構成されており、第一章が「精神」と「生命」、第二章は「哲学的人間学の根本問題としてのシンボルの問題」となっている。そのため、こゝで言及している論文は、結論部分の第一章を指している。
- (2) 『シンボル形式の哲学』第一巻「言語」(*Philosophie der symbolischen Formen, erster Teil, Die Sprache*, 1923) は三〇〇頁であり、第二巻「神話的思考」(*zweiter Teil, Das mythische Denken*, 1925) は三三六頁であった。それに対して第三巻「認識の現象学」(*Dritter Teil, Phänomenologie Der Erkenntnis*, 1929) は、本来加えられるはずであった結論部分を抜いても五六〇頁もの分量であった。
- (3) この点についてクロイスは、『シンボル形式の哲学』第四巻の英訳書の訳者序論において次のように述べている。「結論部分」はカッシーラーの哲学が、いかに形而上学の最も新しい形態としての「生の哲学」へと関係するのかが示されるはずであった。それゆえに「こゝでの主題は確かに第三巻（認識の現象学）を遙かに超えていた」と。Cassirer, *THE PHILOSOPHY OF SYMBOLIC FORMS, vol. 4: THE METAPHISICS OF SYMBOLIC FORMS*, Ed., by John Michael Krois and Donald Phillip Verene, Trans., by John Michael Krois, xi
- (4) Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen, dritter teil* (Wissenschaftliche Buchgesellschaft), 1977, S.IX (『シンボル形式の哲学』第三巻 認識の現象学〈上〉木田元、村岡晋一訳、岩波書店、一九九四年、一三三頁)
- (5) カッシーラーが生前に出版した『シンボル形式の哲学』は全三巻であり、こゝで言うところの第四巻は、彼自身によって完成させられることなく、遺稿として発見された。そこでは上述のように、現代の「生の哲学」に対する批判と、それとの関係における自身の思想の位置づけが行われるはずであった。しかし一九三三年のナチス政権樹立の後、亡命を余儀なくされたカッシーラーがこの計画を遂行することは叶わなかった。
- (6) この論文の冒頭部では、次のように語られている。「我々の長きにわたる探求の道程の最後に、我々がこれまでに見てき

た、それぞれ異なった次元における多くの側面を比較し、そしてそれらを統一するために振り返ってみると、そうした統合の試みでさえも、我々の探求それ自体の問題と方法から生じる一つの困難に直面する」と。Cassirer, *Zur Metaphysik der symbolischen Formen, in, Nachgelassene Manuskripte und Texte, Band I, Herausgegeben von, John, Michael Krois und Oswald Schwemmer, Meiner Felix Verlag GmbH, 1995, S.3*

(7) この点についてカッシーラーは次のように主張する。「これは本当に一般的な思考の限界であるのか、むしろ特定の思考形態によつて設定された限界に過ぎないのではないだろうか。その矛盾は論理的カテゴリーそのものに妥当するものであるのか、もしくはそれは何か特定の空間的、または空間化の思考における形態のみに妥当するものではないのだろうか」と。

Cassirer: op. cit., S.13

(8) Cassirer, op. cit., S.13

(9) ここで言うところの根源的な創造性とは、カント的な超越論的主観性ではなく、意識の内だけに留まらず、シンボル形式によつて文化を生み出す、人間の創造的主観性の作用を指している。

(10) Cassirer, op. cit., S.15

(11) Cassirer, op. cit., S.15

(12) この点についてカッシーラーは次のように力説する。「我々が自身を形成とその力動性の具体的な過程の中心に据えるならば、または我々が二つの様相における対立を、《存在》の対立としてではなく、純粋な《機能》の対立として捉えるならば、この深淵は集束する。存在という点から見た時には、真の対立であるかのように思われるものは溶け合いはじめ、そして活動性または知的創造性という点から捉えるならば、それは「相関」(Korrelation)と「協働」(Ko-Operation)となるのである」と。Cassirer, op. cit., S.16

(13) Cassirer, op. cit., S.18

(14) シェーラーはクラークスの心身論に対して次のように断言する。「クラークスによれば精神は、生およびそれに属する一切のもの、単純で自動的な《表現》を伴う一切の心的生に対して、根源的・原理的な闘争状態にある——相互的補充の関係にあるのではない——のである。このような闘争状態において精神は、人間における生の墮落として、さらには生の病状の進行の現象として現れる。——しかしながらここでクラークスが《精神》と呼ぶところのものは、実は精神ではなくて、複雑

な技術的〈知能〉ではない。——精神と生は相互に秩序づけ合っている。それらを根源的な敵対関係、根源的な闘争状態におくことは、根本的誤謬である」と。マックス・シェーラー『宇宙における人間の地位』（シェーラー著作集13、亀井裕、山本達訳、白水社、一九七七年）一〇〇—一〇二頁

- (15) Scheier, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, 1928, in: Max Scheier: *Gesammelte Werk Bd.9* (hrsg. Von Manfred Frings), Bern/München, 1976, S.31

- (16) Cassirer, «Geist» und «Leben» in *der Philosophie der Gegenwart*, in: Ernst Cassirer, *Geist und Leben*, Schriften, Reclam Verlag Leipzig, 1993, S.40（『現代哲学における「精神」と「生命」』金子晴勇訳、聖学院大学総合研究所紀要三九号、二〇〇七年、一九四頁）以下邦訳での出典箇所は（ ）内にて記す。

- (17) アリストテレスは受動的な感覚とは異なり、身体から独立したかたちで働く思惟「すなわち「作用する理性」(nouspoietikos, intellectus agens 能動理性) の存在を主張した。

- (18) Cassirer, op. cit., S.43（一九七頁）

- (19) カッシーラーは「形相を造るエネルギー」の運動について、次のように言う。「ここで人間精神は直接的に事物に向かうのではなく、むしろそれ自身の世界に、記号の世界に、シンボルと意味の世界に繭を作るように織り込んでいく（spinn）」  
→ Cassirer, op. cit., S.45（一九九—二〇〇頁）

- (20) Cassirer, op. cit., S.45—46（二〇〇頁）

- (21) 人間を病理学的見地から考察するクルト・ゴールドシュタインは、カッシーラーが主張する心身の相関的な対極性を認めつつも、彼が人間の「生命」と呼ぶものが、動物的生命一般と同一視されている点に誤謬があると主張し、次のように言う。「カッシーラーが〈比較的に複雑な動物の本能的行動も結局は連鎖反応にすぎない〉と述べ、また生命領域についてこれが人間においても動物においても同質のものなるかの如く論ずるとき、彼自身もこの誤謬に陥っているように思われる。しかし、動物的存在の生命と人間の生命とはまったく異なったものである。この相違を表現するためには、両者を同じ言葉で呼ぶことによってその相違を隠蔽することを避けねばならぬ」と。（『生体の機能』、村上仁、黒丸正四郎訳、みすず書房、一九五七年、二二九頁）

- (22) 人間以外の全ての動物から見出される純粋な「感受」と「反応」の連鎖を、晩年の著書『人間』（一九四四年）ではそれを

機能的連関 (functional circle) として考察し、人間のみに特有な「象徴系」 (symbolic system) という第三の連関の存在を主張した。

- (23) この作品は次のような形式によって叙述された。身体的な美しさと、優雅な態度を身につけている一人の若者が、偶然的な契機によって自身の優美さに気づいた瞬間に、そうした優雅さが失われてしまった。そしてそれは一度失われると、永久に消えうせてしまい、どれほど努力をしたとしても取り戻すことはできないと。

そしてクライストは次のように結論づける。「有機的世界においてはただ反省がいつそう弱く、不明瞭になるに应じて、美の女神はいつそう輝き、いつそう優勢となる。それにもかかわらず、一方では一つの点から分岐し、無限に向かって進み行く二つの線は、他方では突然再び交差して現れる。もしくは、凹面の鏡の中の像が無限に遠ざかっていきながら、それが突如として再びわたしたちの前に現れる。こうして同時にそれは、まったく意識をもたないか、または無限なる意識をもつ人間の身体構造の中に、つまり操り人形と神の中に、それ自身のもっとも純粋な形態として現れる」と。Heinrich v Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden, Bd.3: Erzählungen, Anekdoten, Gedichte und Briefe*, hrsg. Von K. Müller-Salget, Frankfurt, 1990, S.563

- (24) Cassirer, op. cit., S.52-53 (二〇六-二〇七頁)  
(25) Cassirer, op. cit., S.54-55 (二〇八頁)

## 参考文献

Cassirer, *Philosophie der symbolischen Formen, dritter teil, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977* (『シンボル形式の哲学』第三卷 認識の現象学〈上〉木田元、村岡晋一訳、岩波書店、一九九四年)

Cassirer, Zur Metaphisik der symbolischen Formen, in, Nachgelassene Manuskripte und Texte, Band1, Herausgegeben von, John, Michael Krois und Oswald Schwemmer (THE PHILOSOPHY OF SYMBOLIC FORMS, vol.4: THE METAPHISICS OF SYMBOLIC FORMS, Ed., by John Michael Krois and Donald Phillip Verene, Trans., by John Michael Krois)

Cassirer, «Geist» und «Leben» in der Philosophie der Gegenwart, in: Ernst Cassirer, Geist und Leben, Schriften, Reclam Verlag, Leipzig, 1993 (『現代哲学における「精神」と「生命」』金子晴勇訳、聖学院大学総合研究所紀要三九号、二〇〇七年)

Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, 1928, in: Max Scheler: Gesammelte Werk Bd.9 (hrsg. Von Manfred Frings), Bern/München, 1976 (『宇宙における人間の地位』シェラー著作集13、亀井裕、山本達訳、白水社、一九七七年)

Goldstein, Der Aufbau des Organismus (『生態の機能——心理学と生理学の間——』村上仁、黒丸正四郎訳、みすず書房、一九五七年)

Verene, Cassirer's Metaphysics, in: THE SYMBOLIC CONSTRUCTION OF REALITY—The Legacy of Ernst Cassirer—, ed. By Jeffrey Andrew Barash, The University of Chicago Press, Chicago and London, 2008

BAYER, CASSIRER'S METAPHYSICS OF SYMBOLIC FORMS, A Philosophical Commentary, Yale University Press, New Haven & London, 2001

金子晴勇『現代ヨーロッパの人間学』知泉書館、二〇一〇年